# 大杉谷国有林からの手紙

## 47通目 ～大杉谷での森林整備～　2020年9月

豊かな自然を育む大杉谷は、ユネスコエコパークや森林生態系保護地域に指定され、ブナなど広葉樹の森林をイメージされる方が多いと思いますが、御杣山（みそまやま）の時代から、主にヒノキを有する山でもありました。

現在でも大杉谷は面積の約48％がスギ・ヒノキの人工林が占めており、今も山を健全に保つために、様々な森林整備事業に精力的に取り組んでいます。

今回の大杉谷国有林からの手紙は、現在行っている森林整備事業の中でも主軸となる、間伐、木材の搬出に焦点を当ててご紹介します。

（1）間伐について

間伐とは、木と木が混み合っている林をチェーンソー（木を切る機械）等を利用して木を伐採し、木々の隙間を空ける、森林の間引きを行う作業を指します。

写真1は、今年度伐採する間伐前のヒノキ人工林の写真です。間伐前の林内は樹冠（写真2）から差し込む光が少ない事から下草等が生育しにくい事が1つの特徴として挙げられます。

写真１　間伐前のヒノキ人工林

下草が十分に生育していないと、雨が直接表土に当たり、地表の水分や栄養分を保持してくれている土壌の構造を壊してしまい、土壌に水が染みこみにくくなり、水が土壌の表面を流れ、土を削り、崩壊等する危険が高まります。

写真２　写真１のヒノキ樹冠

写真2は、写真1のヒノキ林を下から樹木の頂天に向けて撮った写真です。上の隙間があまりなく、暗い印象を受けます。

間伐作業を行わないと、写真2よりも光が差し込まなくなり、林冠に光が届かなくなると、樹木の下枝が枯れてしまい、枝、葉が少ないと幹の太さの成長も弱くなることから、樹形はひょろひょろのもやしの様な形になり、雪や風にめっぽう弱くなってしまいます。このまま手入れを行わず放置すると木が倒れたり、土壌が流されるなど下流に被害を起こすことに繋がります。

そのため、健全な森林を育てるため間伐は必須の作業となっています。

(2) 集材から運搬のプロセス

次に集材と運搬についてお話しします。

写真 3　架線を張って山で伐った木材を集めます

大杉谷は以前の手紙でも急傾斜な地形であることはたびたびお話ししていますが、間伐により伐採した木材は、緩やかな地形であれば、林道や作業道を開設し、高性能な林業機械を使用して木材の搬出、運搬が行えますが、きわめて急峻な地形である大杉谷では、昔から行っている山から山へワイヤーを張って伐採した木を運搬する架線集材により全て行っています。(写真3)

集材では、木を切り倒した後、運搬時に他の木に引っかかり木を傷つけてしまうことから、大きな枝をチェーンソーで切り落として木を架線に繋ぎ、幹だけを山から運搬します。(これを全幹集材と呼びます)

写真 4　グラップルで作業箇所まで運搬します

運搬の際は、木にワイヤーを繋ぐ者と集材機操作者はトランシーバーで連絡・連携を図り、安全作業でゆっくりと運搬し土場に下ろします。

下ろした木材は、グラップル（建設機械の林業用アタッチメント）でつかみ、作業箇所まで運搬してチェーンソーを使い、一定の長さ（3mや4m）に切り揃え、捨てるところが少なくなるように分割していきます。

その際、市場での販売価格や需要に合わせて、6mなどの長い材にカットする場合もあり、市場の需要等を把握しながら臨機応変に対応しています。

切り揃えられた丸太は、写真4の様にグラップルでつかんで綺麗に並べられた後、トラックへと積み替えられ、木材市場や協定先の工場に運搬していきます。

この丸太は、柱や合板、家具や割り箸などに生まれ変わり皆様の身の周りで利用されますが、昨今の木材の価格の低迷に加え、世間を騒がせている新型コロナウイルスの影響により、住宅需要などが低迷していることで、いつも以上に厳しい状況にあります。

林地の荒廃を防ぐ間伐は計画的に実施する必要があり、需要と供給の狭間で苦しい板挟みの状況が続いています。

写真 5　切った丸太は整理し綺麗に並べます

コラム　【未来の大木を夢見て】

　ここまで間伐や集材など、木を切ることをメインに書いてきましたが、大杉谷には少ないながらも新しく植えたスギ、ヒノキの幼木達も住んでいます。

　写真6は、昨年度植付をおこなった箇所の写真です。スギの幼木とともに46通目でご紹介した架線跡の方面を写しています。

　植えられたばかりの頃は根がしっかり張れていなかったのか、あまり元気がない苗木もありましたが、今年の8月4日に枯損調査に行った際は皆元気にのびのびと生育していました。

写真 6　未来の大木候補のスギ幼木

**2020年9月**

**編集：三重森林管理署　尾鷲森林事務所　係員**
**発行：三重森林管理署　尾鷲森林事務所　地域統括森林官**